

「俯瞰」と「アイデア」がイノベーションを推進する人材の基盤

東京農工大学 大学院 農学研究院 教授

千葉 一裕 氏

●東京農工大学におけるイノベーション人材養成

産学連携やイノベーションなど、現在、我が国で推進されている連携による研究開発や技術開発の取組では、特に活動を推進する上でのリーダーやコーディネーターなど、特に「中核人材」の力量が重要であると多くの場面で言われており、そのための有能な連携人材の育成が喫緊の課題となっている。

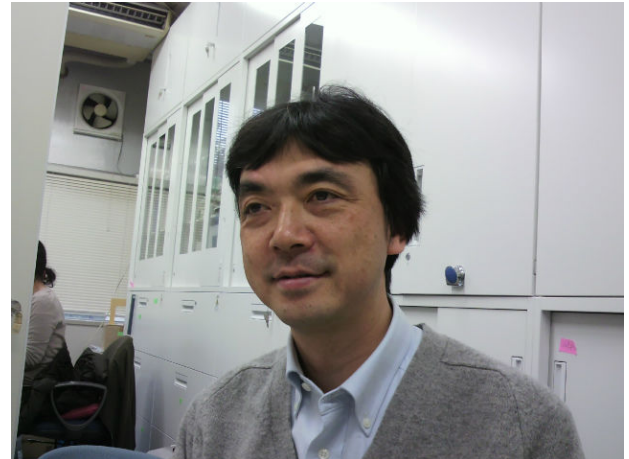
これに対し東京農工大学では、イノベーション推進活動に関する国際的な連携活動の中から「日本型イノベーションプログラム」を開発し、高度研究人材として期待される博士課程学生や大学事務職員等を対象に、イノベーションマインドの醸成やイノベーション推進の重要性を理解してゆくことを目的とした「イノベーション推進者養成プログラム」といった特徴ある取組を実践している。

ここでは、次世代コーディネーターの育成といった概念のもと、同大学におけるプログラムの狙いや、今後、必要とされる人物像などについて、プログラムの発案者である同大学イノベーション推進機構長 千葉一裕氏にお話を伺った。

イノベーション推進者養成プログラムとは？

当該プログラムは、イノベーションの推進において世界の先端を走るスタンフォード大学（SRI International）との連携により創出されている。連携やイノベーションの実現を図る中で、スタンフォード大学が有する高度人材育成のメソッドを研究し、それを日本版に置き換えプログラムの推進が図られている。

「イノベーション推進者養成プログラム」は東京農工大学の基幹戦略として推進されているが、この活動の推進力を高めるため、文部科学省からの支援を受け、広域多摩地域の企業等と連携して研究推進力を付与する実践的な教育プログラムの開発や国内の博士学生を企業やシンクタンクに派遣する実践研修、更には海外での研修や人材育成を目的とした連携活動などを実施している。



東京農工大学 大学院 千葉一裕 教授
(東京農工大学 イノベーション推進機構長)

このような展開を持つ当該プログラムにおいて、初めに、プログラム立案の着想段階における思いなどについてお話を伺った。

「産学連携やそれに係る大学の出口として、イノベーションの創出と言われますが、正確な意味でイノベーションの創出や実現に向けた活動が推進されているものは少ないのが現状です。

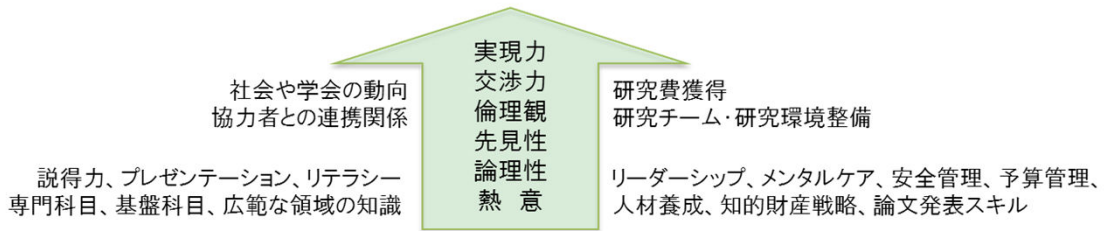
例えば、大学の産学連携の場面では、大学が持つ技術シーズの利活用や、それに伴う特許の取得、更には、それを支援するための知的財産戦略やTLOの活動など、多くの取組が挙げられますが、これらはすべて、イノベーションの創出や実現に向けた手段であると考えられます。しかしながら、現在、取組まれている産学連携活動の多くは、この手段を目的化し、本来の意味でのイノベーションに結びついていない状況が目立ちます。

私が考えるイノベーションとは、『新しい価値を世の中に提案し、提案されたものが広く認知・納得のもと、社会において実現されること』だと思っています。企業の側面にとらえれば、これは大きな経済効果に結びつくものであり「新たな顧客価値を生み出し、企業が継続的な利益を得ること」と表現することもできます。また社会的な側

新たな博士課程教育体系導入へ向けて

総合力としての「研究推進力」

評価の高い学術誌に掲載される 研究課題の未来価値が理解される



導く立場から深い学びの機会を得る



博士学生がファシリテータ
となって、中学生、高校生、
学部学生対象のイノベー
ション推進研修を実施



- 「正解のない課題」に共に
挑戦
- 初等、中等教育改革へ
波及

導く立場から深い学びの機会を得る



大手シンクタンク
『6次産業化人材育成事業とは』
中小企業
『中小企業の課題と進むべき道』
『八戸から全国へ〜
冷凍寿司流通の鍵』

顧客に直接触れて重要課題を見分ける
派遣先に自ら課題やプロジェクトを提案
企業職員と共にイノベーション研修実施
多くの組織間連携により養成すべき博士人材像を明確化

面では、豊かな社会を形成するために技術が寄与することで「より多くの人たちの笑顔がみられる社会の実現に向けた重要な架け橋となるもの」と言うこともできます。

このような目的が必要とされるイノベーションに対して、もっとも重要となることは、先端研究や基盤研究を含めた有意義な研究活動を推進できる実力に加え、社会との関連性を視野に入れながら高い専門性をもった高度な思考、計画、実践力を有する人材（特にリーダーとなる）の育成だと思われま

す。東京農工大学では、このような視点をもとに「イノベーション推進機構」を設置し、博士課程学生や大学事務職員等を対象に、イノベーションマインドの醸成やイノベーション推進の重要性理解を目的に当該プログラムの実践しています。」

とのことである。

イノベーションマインドの醸成や推進の重要性を理解することは、産学連携コーディネーターの資質とも同様

大学のイノベーション研究に対する取組であるため、主に修士や博士学生を対象に実施されている当該プログラムであるが、その理念は、現在、国内各所で推進されている産学連携コーディネートの概念とも深く繋がるものである。

先にも記したとおり、イノベーションとは、本来、先端的な技術シーズを利活用し、その成果をもって広く社会への寄与、貢献を図ってゆくものである。これに対し、従来より実施されてきたものの多くは、商品開発や特許取得などの手段を目的化した成果に走りがちであったと思われる。

広く社会に対しての寄与、貢献を目指すものであるならば、やはりイノベーションの視点の先には、社会を俯瞰して課題を捉え、その課題に対して適切な処方方を技術において行うことが重要となる。

引き続き、この点についてお話を伺った。



「確かに、私たちが推進しているプログラムは、イノベーションを推進するリーダー育成を目的としているものですが、産学連携におけるコーディネーションにも繋がる考えだと思っています。だからこそ、学生以外に大学職員も対象にしています。

しかしながら、コーディネーターは過去の実績など多くの事象を経験し、その中で課題解決のための手段を講じることが多いと思いますが、その経験がむしろ発想やアイデアを生み出す際に邪魔をしてしまうことも考えられます。

それだからこそ、私たちは当該プログラムにおいて学生を対象にしています。すなわち、早い段階から俯瞰的な視点を養わせて行くわけです。しかしながら、実際にプログラムを実施して思うことは、既に博士学生でも遅いかもしれないと思うことです。博士学生は既に主要となる研究対象や目指すべき将来像をもっています。これらの人材に対し『もっと視点を広く社会を』といっても、なかなか簡単に理解できないという場面が多いのも事実です。

そのために、プログラムでは、これらの学生が高校生や中学生に対し、自身の研究が持つ社会的意味を教え、その過程で研究が社会に寄与、貢献することを実感させるといった活動も併せて行っているわけです。」

農林水産・食品産業分野のコーディネートの特徴

イノベーションや連携コーディネーションを推進するには、俯瞰的な視点とアイデアをもった課題解決のための柔軟な発想力が重要であるということが、これまでのお話で整理することができた。

これらの視点を踏まえ、特に農林水産・食品産業分野におけるイノベーションや連携コーディネーションを推進する上でのポイントについて意見を伺った。

「農林水産分野においては、特に俯瞰といった視点が重要だと思います。そもそも農業の場合、計画的に種をまき、育て、収穫して、販売までトータルに行う分野ですし、また、それを何年も継続しなければなりません。その意味で言えば農業とは、そもそも日常の業務が出口を見た俯瞰的な分野だと思われます。これらの分野の技術等に対するコーディネーターは必然的に俯瞰的視点が求められると思います。

社会システムや技術、効率化等のためのハイテクの利用など、さまざまな場面を想定し、広い視点をもった人材こそ、農学分野のコーディネーターに必要とされる要件ではないでしょうか。」

コーディネートの持続性、モチベーションの維持

最後に、当該プログラムを推進してゆく上での課題についてお話を聞いた。

「このような育成活動を進めても、実際に社会に出て、このような視点で自身の業務や研究を続けて行くのは非常に難しい問題もあります。単刀直入に言えば、俯瞰的に物事を捉えるためのモチベーションの維持です。

当該プログラムで人材育成を行っても、その後所属する組織や機関によって、継続的なマインド形成が行われなければ、結果として目先の成果が優先され、俯瞰を養うモチベーションは低下してしまいます。現在、大学で進めている活動をその先の組織や機関でも維持することができる『イノベーション推進人材養成の社会システム』を構築してゆくことが、これからの我が国には強く望まれるものだと思います。」



(文：長谷川潤一 (社) 農林水産・食品産業技術振興協会)